

平成 26 年度浜松創造都市推進会議 第2回音楽専門部会 議事録

日 時：平成 26 年 9 月 16 日（火）午後 6 時 00 分～午後 8 時 00 分

場 所：浜松市役所本館 5 階 庁議室

出席者：梅田英春委員、峯郁郎委員、中村勝也委員、金子和祐、相原靖委員
岡部比呂男委員、小林昌史委員、土屋史人委員、初村則子委員、清水和宏委員、
高橋由美子委員、伊熊元則委員、後藤康志委員、嶋和彦委員
(オブザーバー)

影山伸枝創造都市推進担当課長、瀧下且元産業振興課長、森田孔二文化政策課長

報 道：1 人（静岡新聞）、資料のみ提供し翌日説明 1 人（中日新聞）

傍聴者：1 人 川嶋朗夫担当部長

事務局：鈴木三男課長補佐、竹本澄生グループ長、小川由利子（文化政策課）

影山元紀グループ長、宮木広由

(以上、企画課創造都市推進グループ)

1 開会（事務局 鈴木）

2 委員紹介（事務局 鈴木）

金子委員挨拶

これより 進行は梅田部会長

3 挨拶（梅田部会長）

静岡新聞でコラムを掲載している関係で、いろいろな場所で話しかけられる。知らない人からもメールが着たりして、静岡はおもしろいところだなと感じている。

4 報告事項

(1) ユネスコ加盟都市との連携事業・国内 4 都市の取り組み状況について

資料 1 説明（事務局 鈴木）

(梅田部会長)

浜松市が音楽創造都市に選ばれたときには、他都市と同じように、展示をしたり、国際会議を行うなど特徴のある催しをやっていかないといけないことを認識してほしいという趣旨で事務局から報告があったと思う。何か質問はあるか？

(小林委員)

シンポジウムなどを開催している都市は、市民が聴けるようにオープンで実施しているのか？

(事務局 鈴木)

オープンです。

(梅田部会長)

フォーラムや国際会議を中心にやっているところもあれば、神戸のビエンナーレのように、作品をみてもらうなど、いろいろな形がある。国際会議だけだと市民に浸透されにくい。市民が広く享受できるものを実施していかなければならない。

5 議事 (事務局 鈴木) が進行

(1) 音楽を通じた文化的多様性に関する国際会議について

資料2 説明 (事務局 鈴木)

(梅田部会長)

まとまった意見をいうのは難しいかもしれないが、今後のプログラムや会議に反映していくためにも、断片でもいいので発言をお願いします。資料に基づいたものでも、個人の意見でもいい。様々な意見を集約していきたい。

口火として意見を申し上げる。前回の会議でも申したが、創造都市の柱として文化の多様性が必要。浜松には小さなところや、大きな会社の様々な楽器産業や工房がある「楽器のまち」であり、日本の中ではここだけである。浜松市が支援をして楽器をつくっている方々のブースをつくり展示をして、海外の方に西洋の楽器だけでなく、文化の多様性を反映して小さなものから大きなものまで様々なものをつくっていることを、実際に目で観てもらうことで浜松を国際的に知ってもらうことができる。ぜひ、検討してもらいたい。

(岡部委員)

楽器などを展示するなら、楽器博物館を核にするのが自然。

(嶋委員)

外国の民族の多様性だけでなく、日本・市内の多様性を出さないといけない。

(梅田部会長)

私は教員になる前に国際会議のディレクターをやっていたが、海外の方は日本的なものを求める。浜松には中山間部に様々な芸能があり、イベントにもなる。浜松の人には祭りであり、音楽と認識していないが、「浜松まつり」は、法被を着て、おはやしがあり、ラッパがあり、西洋と東洋が融合している多様性がある文化である。音楽の場合は観て聴くことができ、外国人にはセンセーショナルなので、ぜひ活用してもらいたい。

(小林委員)

国際会議は海外に PR するにはとてもいい機会である。ただし、イベントだけで終わってしまうだけでなく、市の施策に反映していかないといけない。今後の方向性などの合意、コンセンサスも発表できたらいい。

(梅田部会長)

現在、市はユネスコで認定されることがゴールになっている。国際会議では今後どのようなことをやっていくのか？利益があるのか？考え、アジェンダを決めて進んでいくことが大切。

(金子委員)

創造都市ではイベントをやるだけでなく、どういうまちづくりにしたいのか？ランドデザインが必要となる。創造都市としての指定が市民レベルでどんな影響があるのか？市民が音楽に対してどんな姿勢をもっているのか？浜松市ではみんな楽器が演奏できるなど（県民ショーのテレビ番組では、浜松の人は皆ラップと太鼓ができると放送していた）楽器を奏でるということも文化なのかもしれない。

(梅田部会長)

行政には耳が痛い話かもしれないが、やらないといけないことが先行している。どんな将来像を描くのか？今もっている音楽的な特徴を活かしつつ、世界に広げていくこと。大切なのは、市民の意識が変わること。

他都市を調べてみたが、ユネスコ創造都市になっていることを知らない市民が多く、一部の人だけで盛り上がっている。市民レベルに創造都市は浸透していない。浜松市ではアマチュア演奏家が多く、小学生から大人まで吹奏楽に取り組んでいるところであり、老若男女まで創造都市のことが浸透することが大切。

まず、市民に理解してもらい、それから県、日本、世界へと理解してもらうことが理想。理想を持つことは大切。最初は浜松をPRする内容になってしまうが、他都市と違う特徴を出し、将来像も踏まえた内容を考えていきたい。

(土屋委員)

浜松では吹奏楽をやっている人が多く、人口比率から考えると日本一という統計結果もある。アマチュアのレベルが高く、吹奏楽のセミナーを実施すればシニアの方をはじめ、多くの人が集まる。浜松まつりをはじめとする浜松人の特徴なのかもしれないが、自分でやりたい人が多い。一方で国際ピアノコンクールなどの国際イベントにはお客が集まっていないことがある。高校生などのアマチュアイベントには、たくさんのお客さんが集まる。浜松はアマチュア音楽のメッカであり、駅前で開催するプロムナードコンサートは、日本で誇れるものであり、情報発信力がすごい。これらをもっとパワーアップすることもいいのでは。

アマチュアを育成していくことも、浜松文化の特徴になるかもしれない。

(梅田部会長)

浜松市の特徴として国際会議等でも吹奏楽が盛んであることを打ち出していけると良い。

(土屋委員)

浜松では聴衆が育っていないといわれる。一方で音楽を楽しむ人が昔に比べて、格段に増えた。アマチュアの活動の場を広げ、活性化させることが、音楽の都に繋がる。文化振興財団も、いろいろな事業を実施しているが、いいコンサートを行うことで聴衆が育つ。

(梅田部会長)

ヨーロッパと文化的背景は違う。西洋文化は日本に入ってまだ100年くらい。まだ音楽文化は育っていない。西洋文化を真似ても仕方がないので、アマチュア楽団が多いことなど浜松らしさとして特長を打ち出すことが大切。

(金子委員)

西洋の物まねではなく浜松流の音楽文化の創出が必要。吹奏楽団の多さ、楽器産業の集積性などの特徴に加え、音楽に親しむ（聴く）文化の涵養が大切である。

(岡部委員)

国内のこれまでの加盟都市に比べれば、浜松にはピース（要素・素材）がたくさんある。今後これらピースを我々でつなぎあわせていく機会に国際会議を行えば良い。

(金子委員)

浜松の人は音楽だけでなくいろいろなことで浜松の良さを認識していない人が多い。まとまったコーディネイトが出来ず、統括できず、活かされていない。住みよさ・暮らし易さなど行政も我々も浜松の良さを再認識することが必要。国際会議を開催してもアフターコンベンションなどで滞在したくなる都市の魅力を創っていく必要がある。

(梅田部会長)

学生からどこが音楽都市なのと訪ねられることがあるが、オペラやオーケストラのコンサートに人が入らないというだけで、音楽都市ではないということはない。この会議で浜松らしい音楽都市を模索できたらいい。イベントも一過性で終わるのでなく、地道に継続性していくことが大切。

(清水委員)

地域に根付いた市民の音楽文化こそが大切。吹奏楽などをやっている人が浜松には多く、その多くが楽器メーカーに勤めている人である。楽器メーカーに入りたくて浜松に来て、音楽をやっている人がたくさんいる。国際会議も音楽祭も大切だが、併せて市民を理解し市民の機運を高めることが大切であり、市民が総出で盛り上げる環境をつくることが大切。

(梅田部会長)

プロが育たないという人もいるが、西洋とはちがう浜松の特徴を活かすことが大切だと思う。

(初村委員)

これからの浜松の音楽文化には子どもの存在が大切。先日、市音研が開催されたが、子ども達の鑑賞レベルが上がった。小学校4年生が中心に出演していたが、聴く態度、演奏レベルも昔に比べて上がった。今回で既に67回にもなるが、浜松だから実施できていると思う。浜松ではこのような音楽会が多く、NHK全国学校音楽コンクール県大会では、今年、浜松の小・中・高校の全てが1位となった。(静岡市から出場する学校は1つもない)。親も必ず見学に来てくれ、熱心である。創造都市も子供たちを中心にアマチュアの音楽文化が広がればいい。

(梅田部会長)

いろいろな意見をいただいたが、世界(民族)音楽の祭典をおこなうことも申請書に記載してあるとのことなので、次の議題にいきたいと思う。今までの意見も次の議題につながると思う。

(2) 世界(民族)音楽の祭典 in 浜松について

資料3 説明(事務局 鈴木説明)

(3) 意見交換

(梅田部会長)

音楽祭の内容はまだ何も決まっていないが、やはりグランドデザインが大切。委員の皆さまのいろいろな意見をお願いしたい。

(金子委員)

申請書での民族音楽とは?日本の民族音楽とは何を定義しているのか?

(事務局 鈴木)

答えるのが難しいが、ひとつのヒントとして、ボローニャ市等からも浜松市楽器博物館のコレクションが世界を対象にしていることを高く評価されており、ユネスコの理念である文化的多様性の実現にも資することから申請書に記載している。しかし、今は梅田先生のお話を伺うなどして、概念を広く持ち、西洋音楽だけでなく、吹奏楽や電子音楽など、新たにいろいろなことを取り入れいかなければならないと認識している。

(相原委員)

市民の音楽活動が盛んなこと、楽器メーカーが盛んなことなどが浜松の特徴。行政側では物理的な制約がありつつ、音楽祭を開催していく記述になったと思う。危ないなと思うのが、単発的に実施されて終わってしまうこと。ストーリーとグランドデザインが大切であるがそれぞれがそれぞれの立場で話をしていると統率ができないのでは。外部の人をお願いするのがいいのか分からないが、ディレクターやプロデューサーが必要なのでは?今まで意見としてでたいろいろな要素をストーリーに編みあげて、いくつかのストーリーをだして選んでもらうなどしないと、意見がまとまらないのでは。国際会議の内容をすぐに

決めないといけないということであれば、新たな方法を考えるのも一つではないか。

(峯委員)

私も同感で、浜松にはピース（要素・素材）がたくさんあるが、利点でもあるが、反対の部分もあり、いかにまとめるかで、最大の力が発揮される。ピースの多さをどれくらい力が発揮できるのか？ディレクション、交通整理、リーダーシップが必要になる。

(梅田部会長)

アートディレクターを設けるかどうかは、事前の打合せで事務局と議論はしている。しかし、人選や金銭の問題など難しい部分も多い。名前だけのつけても仕方ない。浜松のことを良く知っている人でないと意味がない。東京から著名人や偉い先生を呼ばばいいというものでもない。今の段階では難しいと思うし、事務局もそうだと思う。

(相原委員)

有名なディレクターを連れてくるとは考えなくてもいいが、誰かがストーリーを何にするか決めなければならない。そうしないとなかなか話が進まない。

(梅田部会長)

そのためにもこの会議でいろいろな意見をもらいたい。部会長として、私もまとめなければならないし、事務局もそのように考えていると思う。そのためにも大きなピース（要素・素材）を出してもらいたい。

(後藤委員)

ユネスコ創造都市ネットワークのネットワークが大切。先日の世界青少年音楽祭でも、世界の子供たちと交流を行い、みんな生き生きとしていた。我々の特徴を活かし、ネットワークを使って何ができるのか？を国際会議で議論いただき、その後、継続的にネットワークの形成に励みながら 2016 年の音楽祭を迎えるという形が良い。ネットワーク・交流を年間通して続けることが大切である。「音楽の多様性とは何か？」という議論は難しいが国際交流を通じて深めていける。

(岡部委員)

創造都市のねらいは何かというと、人材の創造（人材育成）だと思う。アマチュアの活躍もあり、ボランティアも育っているが、活躍できるのは東京などの大都市であり、トップのごく少数である。（地方都市としては、世界レベルの音楽家の輩出という点では非常に多いほうだと思うが）トップのみが浜松で演奏会をやって人を呼べる。トップだけでなく中間くらいの人、音楽の専門家や音楽産業に関わる人が浜松に帰って来ることが出来たらいい。そのためには、文芸大に音楽学部ができるのが理想。工場は市外にあるが、住むのは浜松だと考えられるようになればいい。

(梅田部会長)

人材育成は大きな柱ではある。人を育てていくことも大切。

(金子委員)

日々の練習会場の場所、演奏の場所をつくってあげることが大切。浜松に住んで音楽をやるのが街づくりにもつながる。音楽を好きな人が人口流入してくるような仕組みづくり。

(土屋委員)

民族音楽の祭典、その定義とは何なのか？

外からも学ぶことも大切だが、市民からアイデアを公募してみるなど「わが街のやらまいか」ではないが、自分たちの手で創造都市をつくりあげることがいいのでは。もしかして意見が出ないかもしれないが、2年後ならばできるのではないか。

(梅田部会長)

世界音楽の祭典は富山の礪波市で“スキヤキフェステバル”をやっている。アフリカ色が強いが、小さな都市が大きなことをやっている。私も出たことがあるが、市民意識がとても強く、市民レベルで事業を行っている。アフリカからただ演奏家を呼ぶだけでなく、日本に住んでいるアフリカの音楽活動をしている人を呼んだり、そういう方々に指導を受けて、バンドをつくるなど、レベルが高い演奏をしている。

このように市民参加にするために公募型をつくるのもおもしろい。浜松市民だけを対象にするのか？全国を対象にするのか？もちろんコンセプトをしっかりとしないといけない。

(金子委員)

民族音楽の定義とは何なのか？三味線？琴？日本古来の音楽とは？

(梅田部会長)

民族音楽の定義とは永遠のテーマであり分からない。日本古来の音楽はない。浜松でいえば、中間山村地域にある民族芸能が音楽である。演歌は民族音楽か？海外の人からみればそうなる。音階は5つしかないが、オーケストラを使っている。かつて、西洋音楽を民族音楽と認めたくないという人がいたが、浜松はブラジルをはじめとする外国人も多く多文化でもあるので、民族という言葉にこだわらずに、伝統的な音楽から、創造的な音楽をやっていけばいい。ボコタがどんな音楽をやっているか知らない。ボローニャとは違った特徴をだしていけばいい。

(伊熊委員)

民族音楽から世界音楽としても良いが、市民が参加しやすい音楽祭であるべき。また全てを新しい事を実施していくというのではなく、地域で実施されている既存の音楽活動も含めて組み立てていけば良いのではないか。

(相原委員)

浜松で行われている音楽活動、音楽ピース（要素・素材）には何があるのか？まとまったものはないのか？

(事務局 鈴木)

年間のイベントで何があるかは文化政策課に情報があるので、知ってはいる。市民レベルのイベントや財団のイベントなどある。吹奏楽など各ジャンルでつくってはいると思うが、容易ではないが情報を集めることは出来る。

(初村委員)

市民文化フェスティバルがあり、芸術的なものやダンスなどの活動もある。

(梅田部会長)

事業をうまくまとめて、紹介するのもいい。国際会議にあわせて英語のパンフレットを作成してもいい。世界に浜松ではアマチュアが強いという特徴をだしてもいい。ただし、アマチュア団体だけでは世界音楽祭は成り立たない。創造都市ネットワークを活かした考え方、ヨーロッパや南米と違うアジアの特徴を出さないといけない。

(岡部委員)

外にむかって発信するよりも、これからの浜松の若い人たちに世界の音楽の多様性を知ってもらうことが、後につながる。

(高橋委員)

市民がキーワードになる。質のいい聴衆を育てることが、アマチュアの底上げにつながっていく。ピース（要素・素材）がバラバラになっているという意見には同感である。

乳幼児から小学校低学年は音楽教育の大切な時期なので、この柔軟な世代の子供達への音楽教育を一本の柱としてやっていくと良いのではないかと。時間はかかるかもしれないが、10年先、20年先になったときに、浜松はみんなが音楽をやっているということになるかもしれない。今は子どものやりたいことをやらせたいという親が多く、教育の一環として積極的に巻き込んで行けないだろうか。

現代は楽器や音楽の幅も広く、日常的に耳にしている電子音楽を取り込んでいっても良いのではないかと。社会もそういう時期にきているように思う。札幌市のメディア・アートもかなり進んでいる。音楽だけでなく広い文化融合を目指し、電子音楽を他の芸術分野と融合させるとか、音楽プログラミングソフトの結集など、地元楽器企業の高い技術とノウハウを中心に、他の都市ではまね出来ないようなコンテンツを創出していくべきではないかと。

(梅田部会長)

創造都市では教育を考えていくことは大切であるが、一過性のイベントでは、なかなか難しい。長期に渡って、ワークショップなどを開き、中山間地域から子供たちを呼んでやっていくなどしないといけない。

民族音楽ではなく、世界音楽と考えていく方が浜松の特徴が打ち出し易い。しかし、どういったコンセプトでいくかが大切。今日のいろいろな意見を集約して特に世界音楽に関しては、グランドデザインの中で何が出来るのか決めていきたい。行政主導ではなく、我々の考えを取り入れてやっていきたい。それが部会の在り方の意義や、実行委員会につながると思う。

今後、部会を基に実行委員会がつくられると思うが、政治家や様々な圧力に屈せず、実行委員会と事務局が主体になり、いろいろな意見を取り入れて、グランドデザインに基づいたものをつくってもらいたい。そのために皆さんの知恵を結集させていきたい。

6 その他

事務連絡（事務局 鈴木）

- 次回は11月13日木曜日、時間は18時、場所は802会議室を予定している。
- 次回は、今回の続きと、ユネスコの総会が中国であるのでその報告が出来ればしたい。まだ、そのときにはユネスコの発表はされていない。

7 閉会